（現在もエミノニュ区にその名を残している）にコーヒー（カフヴェ）を販売する店とコーヒーを飲ませるカフヴェ・ハーネ（コーヒー館）を開いたことを記している。カフヴェ・ハーネは、まず商談の場として地域の商人から重宝がられたが、すぐに詩人、吟遊詩人、漫談師、影絵師などの芸人が集う憩いの場として人気を博することになった。支配者（スルタン）の宮殿であるトプカプ宮殿にも、直ちにコーヒー給仕の役職が設けられた。

ボスフォラス海峡や金角湾を見下ろす風光明媚な場所には豪華なカフヴェ・ハーネが立ち並んだ。大きな店では、窓際に客席を設け、店内中央に噴水を設けて水の音を楽しんだ。給仕場には、陶器の小さなコーヒー・カップや金属性のカップ立てなど並べられ、若く美しい少年たちが客の接待におわれた。コーヒーやカフヴェ・ハーネは、厳しい戒律を求める一部のイスラーム指導者によって禁止されたこともあったが、その人気の前には禁止令も無力であった。市井のカフヴェ・ハーネは、男性の憩いの場として繁栄した。女性たちは、家庭でコーヒーを嗜んだ。女性同士の集いにコーヒーは欠かせない嗜好品となり、コーヒーの入れ方や給仕の作法は女性に欠かせないたしなみとなった。

コーヒーやカフヴェ・ハーネは、17世紀中頃オスマン帝国から、ヨーロッパに伝わり、数世紀を経て、憩いの場として多様な機能を有した現代人の「カフェ」として世界中に伝播することになった。

（平成16年7月10日実施）

テーマ「人はなぜスポーツをするのか？」

第17話　人間社会におけるスポーツの意義

林　　隆　也（人間学研究室）

人間の行為はほとんど例外なく、何らかの意味で人間の生存に結び付く。それ故、「なぜスポーツをするのか」という問いかけは、「人間はなぜ生きているのか」という問いと同様に、生産的ではない。スポーツの起源をさぐることは、いつから人間になったのか、と同様である。

現代においては、楽しいからスポーツをする。健康のためであるとか、ストレス解消のためであるとかは、後からの理由付けである。種目に関する選択には、それ故、好みが優先し、どの種目にもそれぞれの特徴があり、それぞれに楽しむことが可能である。

その際、スポーツには「遊戯」の要素と「契約」の要素があることに注目する。「遊戯」は、生存のための物質的な生産を伴わないにもかかわらず、人間が生活上、必要としてきたものである。そのため、競技スポーツを目指さない一般市民にとってのスポーツには、楽しみの要素が先行し、勝敗は二義的な意味しか持たないとも思われる。にもかかわらず、勝敗にこだわる場合が多々見受けられることもまた、人間の「遊戯」の多様性を物語っている。

「契約」は、まさに人間が人間同士で或る行動を共にする際の基本的な規約を規定する。「遊戯」と「契約」の両者がスポーツの社会的意味内容を構成する。それ故、スポーツにおける虚構性を学ぶことが、人間の社会の中で生きることと一致する。テレビ中継のために都合が

いいようにルールが変更されることがあるのは、「契約」の特徴である。

現代社会において、スポーツを行なうことは、後付けの意味、意義からいっても、重要である。生活習慣病、高齢化社会に対して、スポーツの意味があることは確かであろう。自ら進んでスポーツを行なう集団は問題ない。スポーツ施設や機会の問題は、社会福祉の問題と伴って、改めて考える必要があろう。問題は、全く身体を動かすことに興味がない、意欲がない集団である。学校教育の問題と同様、そのような人々に如何に動機付けを行なうのか。現代社会において、スポーツの意義とは、この点にあると考えられる。

（平成16年12月4日実施）

第18話　トップアスリートたちの光と影

大　森　一　伸（スポーツ学研究室）

日本では戦後になって経済が豊かになり余暇が増大したことにより、大衆がスポーツを楽しむようになった。その楽しみ方はスポーツを「行う」のみならず、「観る」、「支える」、「消費する」など多岐に渡っており、このことを考えあわせると国民の大半がスポーツと関わっているといってよいであろう。

国際舞台で活躍するトップアスリートの競技力も飛躍した。例えば、1908年の男子マラソン世界記録は2時間55分19秒であったのに対して、現在（2004年12月）の世界記録は2時間4分55秒（ベルリンマラソン；2003年）であり、95年間で50分24秒も短縮された。男女の差を見てみると、初めて女子マラソンが公認された1979年の記録は2時間37分48秒であった。当時の男子の記録を100%とすると、女子の記録は約77%と算出される。これが現在（2004年12月）では約92%となり男子に急接近している。

このような、大衆へのスポーツの普及とトップアスリートの競技力の向上は、いずれも、経済が成長し医科学が発展したことに支えられている。

他方で、著しく普及発展したスポーツはお金儲けの手段として認知され、スポーツ産業が成長した。1980年に国際オリンピック委員会の会長となったサマランチは、スポーツを商業の対象とし、1984年のロサンゼルス五輪では、放送権利や商標登録などで巨額のお金を集めることに成功し「商業五輪」と称された。現在ではオリンピックや人気の高い国際大会の誘致には、巨額のお金が使用されている。それゆえ、トップアスリートの華やかな活躍はお金によって演出されており、勝者は富と名声を獲得することができる。

しかしながら反面では、富と名声を得るために意図的なドーピングを計画したり、人種差別、賭博、暴力、裏金献金といった倫理的に逸脱した行為が蔓延し深刻化している。

スポーツが生活の一部になったいま、このような問題を、トップアスリートとそれに関わる一部の者に限ったものであると看過するわけにはいかないであろう。我々には、スポーツについて真剣に議論し、スポーツの倫理的逸脱現象を「見張る」ことが求められている。そして、スポーツを健全に発展させていかなければならない。

（平成16年12月11日実施）